

銀に魅せられて

Charmed with Silver

金子 透

KANEKO Toru

金属を素材に物造りを始めて約十年の歳月が経った今思うことは、様々な金属に人と同じ様な個性（特性）があり、長所、短所、私との相性などいろいろ考えさせられる。「素材にも意思があるのでは…」そんなことを思いながら素材とのつき合いを楽しんでいる。工芸という分野での面白い点というのはこんな事ではないだろうか。造り手側の一方的なアプローチは、素材には嫌がられ、なかなか思うように行かないのである。

最近、私は銀を良く使う。

ジューと銀を見つめ、触り、エネルギーをもらう、

意外とあたたかいな…と思う、また、柔らかいと思う。

ただ単に見ただけでは解らない思いが、私の内部からフツフツと沸き上がる。

とてもいい気分。

そんなつき合いが、最近の私と銀だ。銀としても、そんな私に少しずつペールをぬぐ、ドキドキする一瞬々に、私はまた魅せられてしまう。

最近、生活のなかで銀にお目にかかることが珍しくなっている様に思われる。テーブルの上のスプーン、身に付けるジュウリー、あと… という具合になかなか思い出すのが難しい。歴史上日本において、銀という素材を生活の中に取り入れることの少なかったこともあるだろうが、西洋などに比べ非常に使用範囲が狭いように思える。

様々な素材が生活を演出し、新素材がぞくぞく開発される中、銀は一見出来の悪い素材に成りつつあるのかも知れない。銀食器は重いし、傷は付くし、手は係るし…。

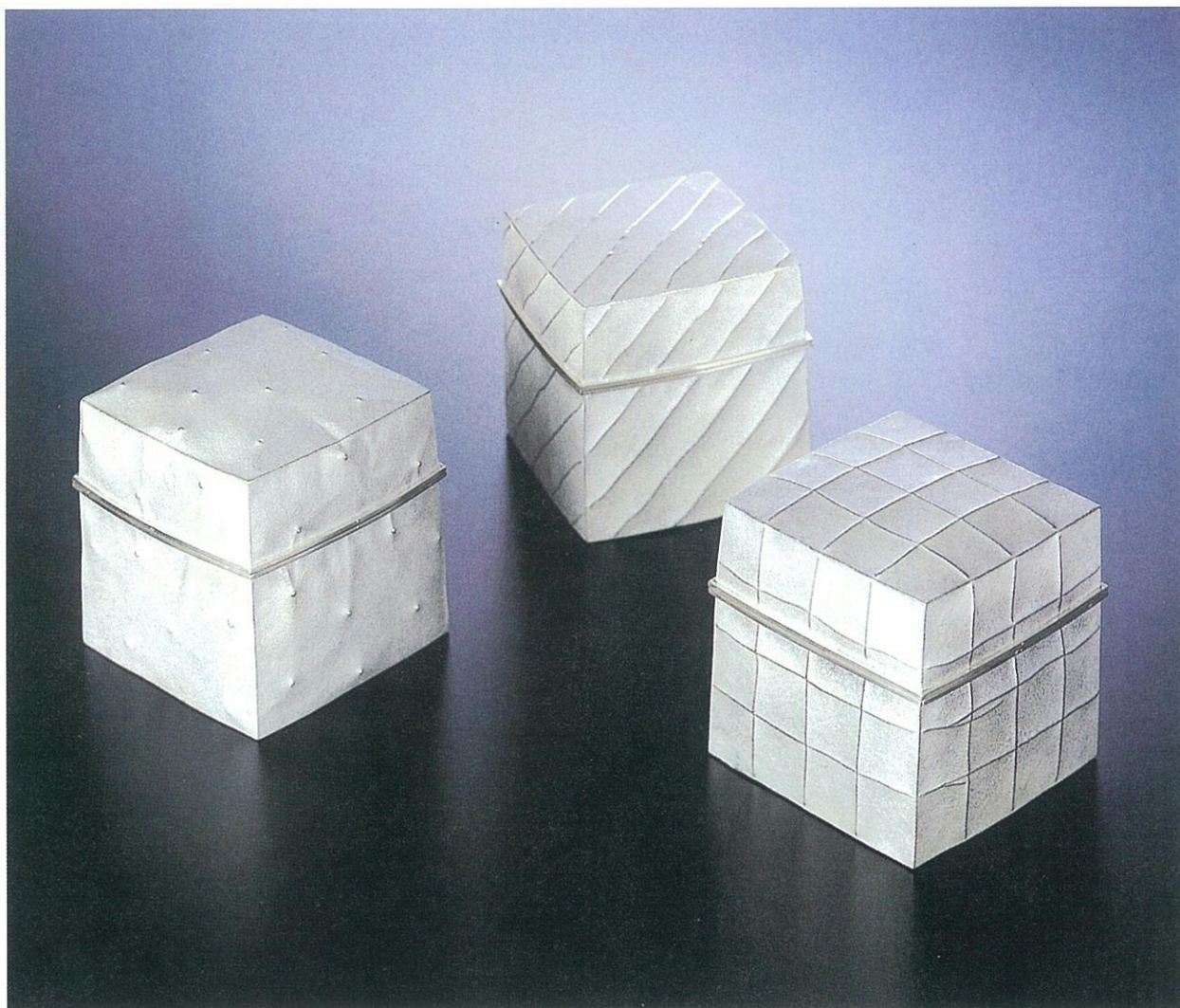
しかし、私には何故かあのやわらかな半透明な輝きがとても魅力的だ。「こんな料理をのせたら美味しく見えるだろうな…、こんな風に体に身につけると面白いだろうな…」そんな銀による演出が創造心を駆り立てる。



「銀鏡」 150 × 150 × 80mm 1995 年 シルバー



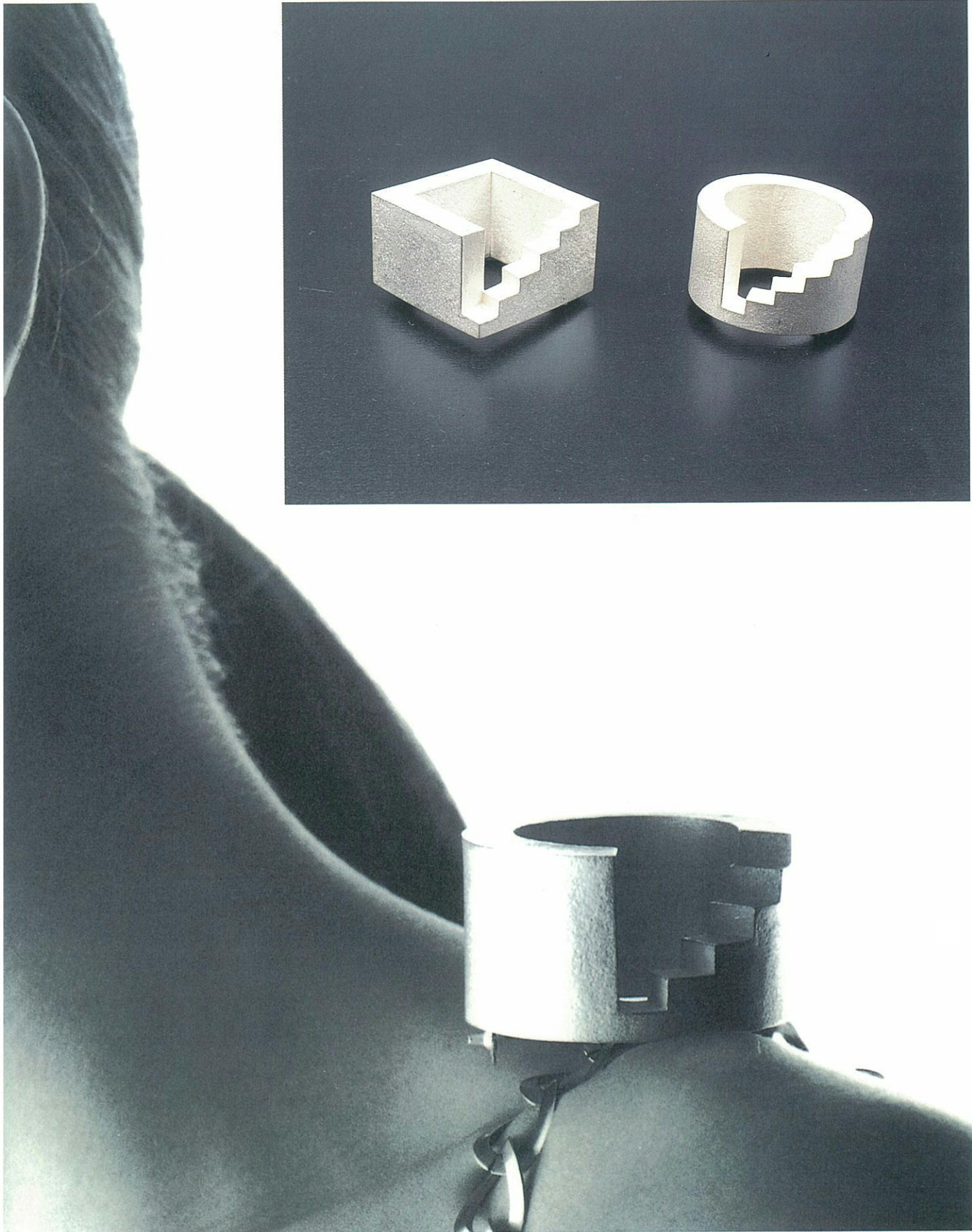
「雪塊」 175 × 175 × 65mm 1996 年 シルバー

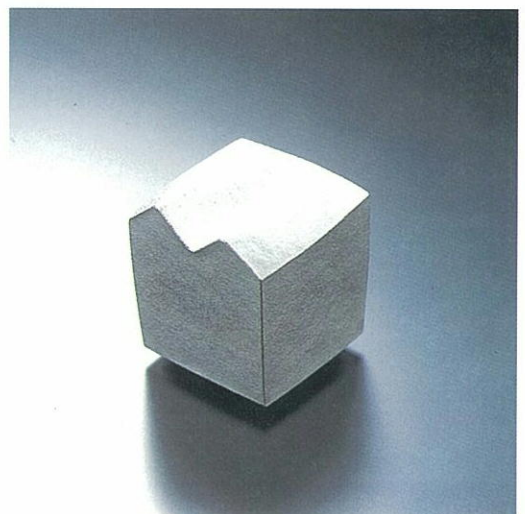
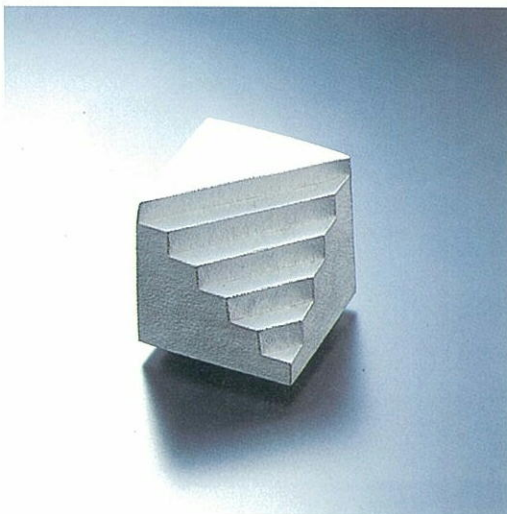
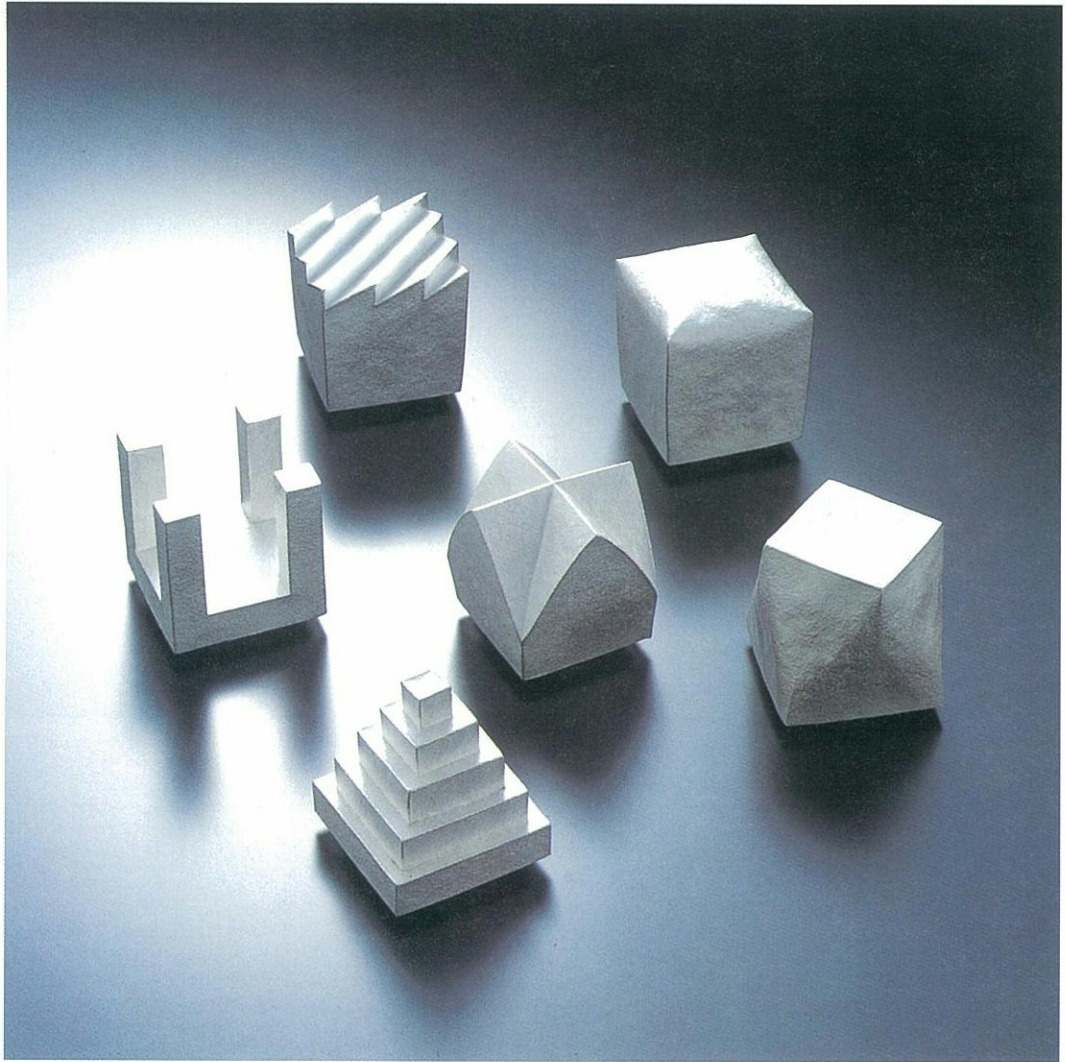


「栗筥」 100 × 100 × 105mm 1996年 シルバー・ゴールド



「ショルダーブローチ」 1994 年 シルバー 協力 ジュエル（レーヌ出版）

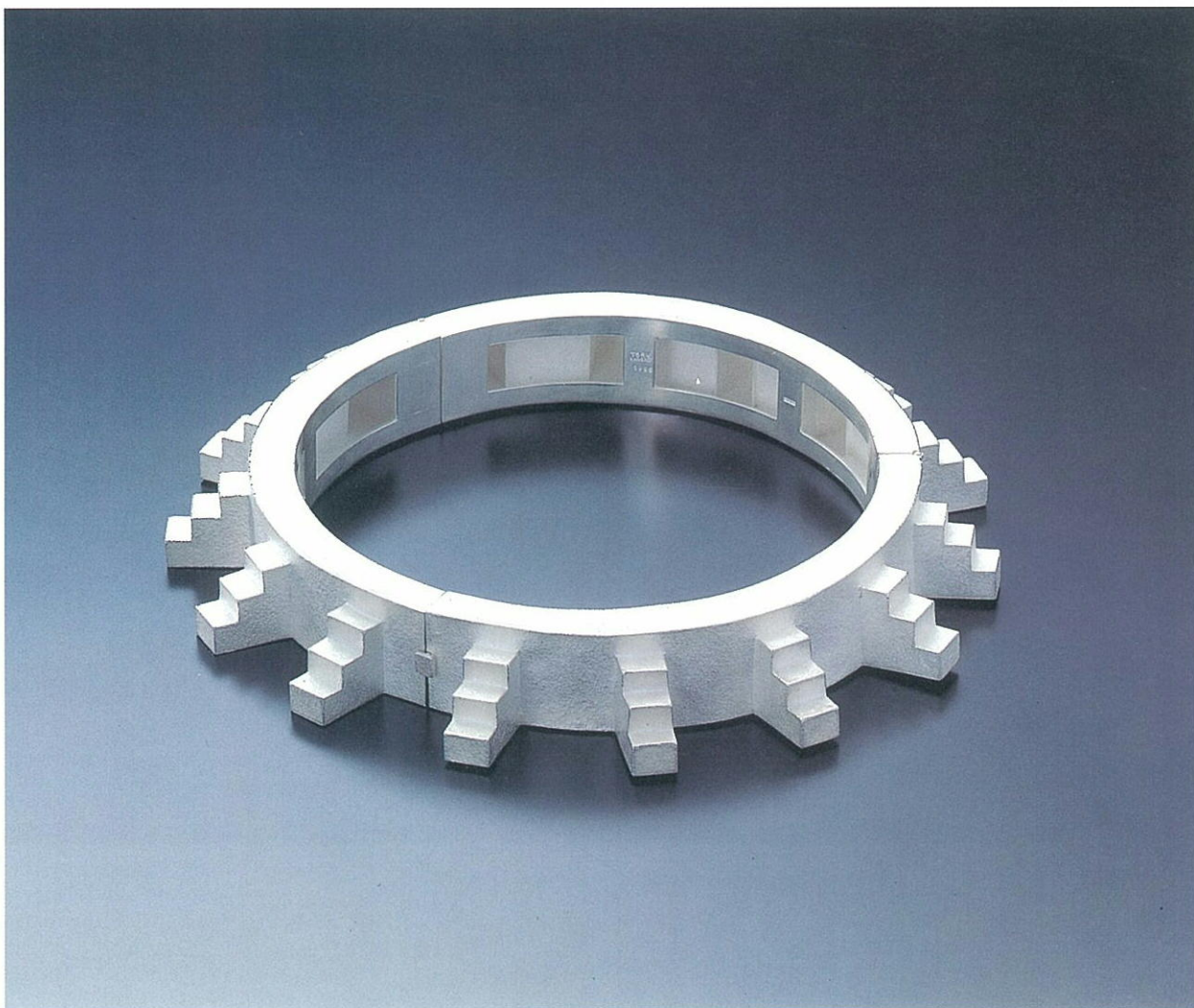




「ショルダーブローチ 8 点」 50 × 50 × 50mm 1995 年 シルバー 撮影 西山史詞



「リング10点」 1994年 シルバー



「ネックピース」 165×165×20mm 1996年 シルバー



「ネックピース」 320×280mm 1996年 シルバー・四分一
「ネックピース」 165×165×28mm 1996年 シルバー